

# 水 稻 の 元 肥 施 用 法 の 実 態

## 小 池 要 三\*

KOIKE, Y. ON the Base Fertilizing Practice for Paddy Rice in Saga Prefecture

はしがき 水稻に対する肥料の実態調査の多くは、肥料の種類、施肥量、施用時期、元肥追肥の量及びその割合等に関するものであつて、どんな施肥法が行われているかと云うことは殆んど調査されていない。

筆者は佐賀県下における水稻に対する施肥法の実態をはあくし、また試験研究の成果がどの程度農家の経営に具現されているかを知るため元肥施用法の実態調査を試みた次第である。

調査方法及び調査内容 主として地区担当普及員に調査を依頼し、農家、4 Hクラブ員等について筆者が接触したあらゆる機会聴取調査を行つたものを取まとめたものである。

この調査では主として化学肥料（石灰窒素は除外した）の施用法について行つたもので、作業順序を表式に示せば第1表の通りである。

第1表の中で、鋤込作業を行わないとか、或は中鋤を行うと云つたように多少作業の繁閑精粗の別はあるが、施肥法の調査であるのでその点許容されるであらう。

調査結果 第1表に示めす九種に類別されるものを佐賀県農業地域区分に基いて推定面積をあらわせば第2表の通りである。

結び 水稻元肥施用法の実態をはあくしたが、元肥

第1表 施肥型と作業順序

1	施	う	鋤	灌	荒	植	插	全層 施肥法
	肥	ね	：	水	代	代	秧	
	う	施	鋤	灌	荒	植	插	
	ね	肥	割	水	代	代	秧	
	う	鋤	施	灌	荒	植	插	
	ね	込	肥	水	代	代	秧	
	う	中	灌	施	荒	植	插	
	ね	鋤	水	肥	代	代	秧	
	う	中	灌	荒	施	植	插	
2	う	鋤	水	代	肥	代	秧	表層 施肥法
	ね	灌	施	中	荒	植	插	
	う	ね	肥	鋤	代	代	秧	
	ね	中	施	荒	植	插		
	う	鋤	肥	代	代	秧		
	ね	灌	山	施	鋤	植	施	
	う	ね	撒	草	用	込	代	
	ね	施	鋤	灌	荒	植	施	
	う	肥	込	水	代	代	肥	

\* 佐賀県農業試験場

第2表 地域区分別推定面積（単位町）

地域	型式	1型	2型	3型	4型	5型	6型	7型	8型	9型	計
山間		686 (15.4)	90 (2.0)	—	120 (2.7)	746 (16.8)	1,270 (28.6)	1,090 (24.0)	417 (9.6)	28 (0.6)	4,447 (100)
	麓	6,142 (31.4)	2,787 (14.2)	2,176 (11.1)	6,571 (33.5)	1,244 (6.4)	—	300 (1.5)	366 (1.9)	—	19,586 (100)
松浦台地		2,082 (100)	—	—	—	—	—	—	—	—	2,082 (100)
平坦		9,071 (37.5)	9,881 (40.8)	—	5,139 (21.2)	133 (0.5)	—	—	—	—	24,224 (100)
計		17,981 (35.7)	12,758 (25.3)	2,176 (4.3)	11,830 (23.5)	2,123 (4.2)	1,270 (2.5)	1,390 (2.8)	783 (1.5)	28 (—)	50,339 (100)

( ) は百分率をしめす。

の合理的施用方法である全層施肥法が水田総面積の約6割、平坦地帯では約8割近く行われていることは注目すべき事であろう。

労力、水利、その他の事情によつて制約を受け、一般に行われ難いと考えられている全層施肥法がとられているのは、山間山麓地帯のように自然灌漑法による地帯では水利の関係、或は土壌条件等によつて制約されるのであるが、平坦地帯のように80%以上が人工灌漑法による処では、水利はある時期以降は自由であり、且つ動力耕耘機等の高能率の農機具の導入に伴い麦なたね等の収穫から水稻植付までの農作業の進捗は施肥法の変化をもたらす大きな原因となつてのではないかと考える。

以上のように全層施肥法が農家の経営に具現されているのは、或は戦前から行われて来たものもあろうし或は強力な指導の結果か、また農民のたゆまぬ努力、経験の累積の結果もあろう。然し多数の農家の中には貴重な肥料を漠然と施しているものも少なくない。そのような農家に対しては実態を知り改善の方向に導き

科学的説明を与え、彼等をしてますます農業に興味をおこさせる契機ともなるであろう。

附図 佐賀縣農業地域区分図



凡例

- 松浦台地
- ▨ 山間
- 山麓
- ▩ 平坦